

昭和四十九年五月十二日 和敬塾塾祭記念講演

## 「教育を考える」

和敬塾ということになりまして、私も皆さんの仲間の一人であります。それだけにまた塾の最近の評判のよいことなどを耳にしますと、うれしいなあ、という気持を持たせて頂いております。前川塾長さんの献身的な御努力、そして関係皆さん達の一致した協力、さらに皆さん方の先輩の築きあげてきた伝統と塾風、それが多くの人に歓迎されてきているんだと思います。

ぜひ、皆さんも和敬塾の塾風、伝統によいものをつけ加えて充実発展させて頂きますよう、お願い申し上げます。数日前に、この二、三年に大学を卒業して文部省に入って参りました数人の諸君に集まってもらいまして、今度、和敬塾に行つて学生の諸君にお話をするんだ、文部省の所管のこととどんなことをしゃべつたら参考になるんだらうなああと聞いて見たいんです。それにご自分の学生時代の話をするんですよ、というんです。私の学生時代のことを話をすると、先ず文部大臣不資格のことばかりではないかと、こう申しました。そ

れでいいんですよ、大へん勇気づけてくれるんです。勇気づけてくれない、こんな話をしたら、あのきびしい考えを持つている前川塾長さんは変な奴をひっぱってきたなあと後悔されるにきまつている。やつぱりしゃべれないじゃないかと、こう思つたりしながら、教育を考える、こんなこともつけ加えさせて頂くこうなどと考へながら、やつてきたところです。

今日、世界には一四六の国がある。半分以上は第二次大戦後に独立した国ですから、いわゆる発展途上国、いずれも教育の改革充実を通じて国の発展をはかつて行きたいと、教育には非常な力を入れております。先進諸国家も、アメリカやソ連も月世界にロケットを打ちあげた。そんなことがあつてから、教育の発展や充実を図らねばならないということで、教育の改革充実問題と取り組んでいるようであります。日本では、教育といいますが、学校教育を非常に重視いたします。しかし、このごろの技術革新の激しい時代において、学校の先生だから

文部大臣 塾理事 奥野誠亮先生

といつて、生涯それだけで通用して行けるわけではない。絶えず早く新しい問題と取り組んで、学び続けていく必要がある。教育は生涯通じて行わなければならない、生涯教育だ、生涯学習だ、といつて大変やかましくいわれています。人間の寿命も延びた、余暇もあるようになった、早く勉強しながら意義のある、価値のある人生を送らねばならない。この生涯教育、生涯学習、これを学校教育、社会教育、家庭教育、それぞれ責任を分かちあいながら努力しているというだけではなかるうかと、かように思うわけでございます。そこで、その三つの分野について二、三問題を拾い上げて話をしたい、こう思つているところでございます。

まず第一に、家庭教育の問題から触れて参りますと、このごろは経済がよくなつて、二歳分ぐらい成長がよいようであります。二歳ぐらい成長がよくて、どうも弱い人間が多くなつてきている、ど根性がない、体格はいいけれど、飛んだり跳ねたり駈けたりする体力に劣つて

いる、といわれております。子供さん達を、林間学校につれて行くとします。昔は現地につくと、子供さん達は木登りを始める。このごろは、現地についてもじつとしてゐる。先生達が木にぶらさがりはじめると、一人二人と木に登りはじめ、何か気魄がない、そういつたことがいわれるわけでございまして、それが血をひいて諸君になつてゐる。諸君の皆がそんなにひ弱いど根性のない人間とは思いませんけれど、いまの若者の通弊になつてきてゐるのではないだろうかと思つてゐます。楽なことをして世を渡つて行きたい、マイホーム的な考え方の青年が多くなつてきてゐる。国家社会を背負つて立つ気概というものがあまり感ぜられない。この社会においてどんな役割を演じようかというようなことはあまりいわない、思わない。何に生甲斐を求めて行くかというような考え方は、あまり論ぜられない。そういうような風潮が多分にあると、こゝろ思つてゐます。ど根性がない、ひ弱いのは、過保護のなせる業だといわれております。

むかしのお母さんたちが、いまのお母さんは電気洗濯機、電気冷蔵庫がある。そういうおかげで、時間がありません。お金も沢山ある。そんなことから、つい面倒見がゆきとどきすぎ。子供を生む数も少なくなつてゐる。更には遊び場が家庭の中でも、街の中でも少なくなつ

てきて、体力が培われない、といったわけでありますので、やっぱりひとつ皆さん達は、社会において何を生き甲斐に将来勉強して行くのか、この社会を俺達が背負つて行くのだという気概をもつて勉強して頂きたいもんだなあ、とこゝろ思ひます。

もう一つ拾ひ上げて申しますと、このごろ、子供を学校に通わせて、知育は私がやりますから、躰は先生しつかり頼みますよ、というお母さんがいるというんですね。知育は私がやりますというから、何をやるのかと思つてゐると、家庭教師を雇うんだ、進学塾へ通わせる、というこゝろらしいのです。全くあべこべであります。躰というようなものは、理屈で覚えさすものではない。子供さんたちは、両親のいうとおりに行つてではなく、両親の行つておられる。頭で教えるものではなく、体で教えて行くものだと思います。そういうことで、小さいときには、ものを覚えさせるより、徳性を培つて行かなければならない。それは家庭がしつかりして、そういう躰をみたくして行かなければならない。躰は先生しつかり頼みますよという、全く逆立ちしたような話が出ておたりするわけでございます。これにはいろいろ理由があるわけですが、学歴偏重の社会の理論から、有名校を卒業すれば、それだけで社会は高く評価して受け取つてくれて、トントンと重要視されて行く。同

時にその有名校に入れば、卒業は楽だ。一方、入学試験は大変むずかしい、難問奇問を出す。入試に突破することは、トントンと上へ行つてしまふ社会へのパスポートみたいなものだから、相当な苦労があつてしかるべきだろう。難問奇問に答えられるように一生懸命受験中心の勉強に励んで、これがもう幼稚園から小学校、中学校、高等学校にいたる日本の姿ではないかというように、非難をされます。私はこういう弊害をいろんな面から糺して行かなければならないということ、一生懸命努力してゐるわけでございますが、とにかくそういうような傾向が見受けられる、ということはお互いよく反省して行かなければならない。入学試験に合格するための勉強、何もかも覚えこもうとする勉強により、何か自ら考える力、創造力、そういうものがいまの若い人に欠けてゐるのではないか、こゝろもいわれます。

こゝろいう勉強が弊害をもたらしたのであるが、子供さん達はテレビにかじりついてゐる、絵はよく見るんだけど字は読まない、絵を見てる、動画を見てる、テレビを見てる、ただその移り変わりに目が奪われているだけであつて自ら考えない。どうもそういう影響で、考えない人間に日本人はなつてきてゐるのではないか。やっぱり、字を読んで考える必要があるんだと、こんなことがいわれていますね。私は

今日、日本人は主体性を欠いている、自主性を欠いている、流され易い、自分の考え方を持たない、こういうものが先程来申し上げているようないるんなどころから影響して一般化していると思うんです。ぜひ皆さん達はしっかり考える人間になってくださいよ。仲よくしていかなければならないが、付和雷同する人間になってくれば困る。私は文字を書かされると、「和而不流」「和而不同」といった言葉を書くんです。仲良くはしているが、主体性を失ってただ流されている、なんでもかんでもイエスマンになつている、それを避けなければならぬという気持を籠めて書くんですけど、主体性のない自主性のない人間が多くなつてきています。あと、心配しているわけでございます。ぜひ皆さん、しっかりした考えを持った人間になるように努力して下さい。

第二に、社会教育の問題に触れて行きたいと思えます。お互いみんなこの社会を構成している一員です。みんなの社会ですから、皆でこの社会を良くして行こうという考えを持たない限りは、この社会が良くなることはありません。そうなんです、こんなことをいうんです。一億国民総無責任時代だ。あるいは一億国民総評論家時代だ。みずからこの社会を良くするための努力をしない。家の中では煙草の吸殻をめたに庭に捨てない人であっても、車に乗っ

て外に出ると、窓からポイポイ吸殻を道路に投げ捨てる。駅のプラットホームなんか汚いですね。日曜日に公園に行くと、芥の山ができています。家の中ではあんな汚いことはしませんね。このあいだ子供さんの作文を読んできましたら、お父さんと一緒に外へ出掛けた。お父さんが車を運転して出掛けて行く。夕飯のときになつていたものだから、友達の家で御馳走が出た。車の運転をしているからというて、固く拒み続けているんだけど、少しぐらい良いじゃないか、というようなことで、酒を飲まされてしまつた。この酒を飲まれたお父さんが怨めしくて仕様がなくて書いていました。酒を飲みたいといつても、皆が車を運転するのだからやめなさいよ、と注意してかかるのが普通なんです、どうもいまでも日本人は、少しぐらいいいじゃないかと、すすめに回るようですね。昨年

の秋には石油問題からトイレットペーパーがなくなつた、洗剤がなくなつた。それは消費者が買ひ溜めするのだから、ちよつとやそつと増産しても追いつかないのは当たり前じゃありませんか、というのが、メーカーのいい分だった。消費者にとっては、メーカーが売り惜しみしているから、品物がなくなつてくる。なくなるとなれば、われわれが買ひいそぎをするのは当たり前ではありませんか、ということになる。あげくの果て、みんなから、それは政治が悪いか

ら、値段があがつて行くんだという。政治が悪いという、急にみんなの意見が一致してしまふんです。若い人達が座談会を持った。農村の方が多かった。先ず男の側から、一、三時間にわたつて蛭々としていまの日本の農業についての不満愚痴が述べられた。こういう農業では、日本の将来農業に携わる気持は持てないとか、いろんな話が愚痴としてこぼされた。そしたら二十歳ぐらいの御殿場からきていた女の方が立ち上がつて、私は農家に生まれて農家に育つたんです。やつぱり農家にお嫁に行こうと思つているんです。三反百姓でいいんです。夫と一緒になつて一生懸命農業の発展につくしたいんです。しかし、いまの話を聞いていると、あの方々のところへは、どの方のところへも行きたくはありません。しあわせは黙つてついてくるものではない、努力して勝ちとるものだから、努力しなければしあわせが生まれてくるはずはない。そんな愚痴ばかり言っている人のところにお嫁に行つて、どうして農業の発展を築きあげることができる、しあわせを築きあげることができるといふのがその若い女性の気持だったようであります。

老人は、過去を語つて未来を語らない、といわれる。諸君は、常に未来を切り拓いて行かなければならない。ぜひ希望と展望をもつて努力して下さい。努力をしないで皆さんのしあわせ



が開けてくるはずはありません。それだけの気概をもって進んでもらいたいものと、こう思います。私はこれからの教育をどうするんだという話をされますと、よくこういうことを申し上げます。わが国過去二十年の教育は、戦前戦中の超国家主義の教育の反省に立つて行われてきたんだと。これからは、過去三十年の超個人主義の反省の上に立つて教育の改革を進めて行きたいと、こう申し上げているのであります。まあこんなことがあるかどうか知りませんよ。超国家主義だ、超個人主義だという言葉があるかどうか知りませんが、私なりに比較的になんていっているのです。そうして過去三十年、物の豊かな社会が築きあげられた。私はさらに心の豊かな社会を築きあげていきたいと思っているんですよとこう申しているのです。やっぱり戦後は過去の反省の上に立つて羹（あつもの）に懲りて膾（なます）を吹く姿も多分にあつたと思います。戦前戦中はいくさに勝たなければならぬ。それだけにみんなが国家社会に尽すべき責務を中心に努力をして行かなければならない。義務は強調される。国家社会からいろんな恩恵を受けている。その報恩感謝の念を持って責務を果たして行かなければならない。戦後はその反省の上に立つて、権利の上に眠る国民であつてはならない。権利の主張に臆病であつてはならない。権利の主張をするのに、いろ

いろ国家社会から恩を受けているのだ、報恩感謝のまことを捧げなければならない、なんていっている、権利の主張が弱くなつてしまいませんか。だから、私は、「有難うございます」とか「すみません」なんていう言葉が極端に少なくなつてしまつたと思つていいます。知らないとところに行つて道を尋ねる。そうしますと、相手の方がわざわざおじぎをしてくれて、「折角お尋ねを頂きましたのに、私は生憎と知らないんです。申し訳ありません」と謝つてくれる。何かほのぼのとした感じが湧いてきます。人によりましては、「そんなことを知らないよ」といつていかれる。聞いては見たけれど腹が立つてくる。また聞いてみる。振り向いてはくれるけれども、一言もいわないで、すーといつてしまふ人がある。そんなときにはこんな人にきかなければよかつたという後悔が、先立つて参るものでございます。やっぱりもう少し権利の主張はさることながら、国家社会に尽すべき自分の責任も考え、「有難うございます」、「すみません」と気軽に出てくるような、お互いの社会にして行かなければならないなあと、こう思うわけがございます。やはり戦前戦中には、国家社会の充実を図つて行かなければならないということが基本だつた。

それはいいですけど、その個人主義がいつの間にかやら利己主義となり、自分の利益だけしか考えない。その自由主義が自分達の自由しか考えない。相手の自由を尊重しない。しかし自我の抑制が行われるのでなければ、己れの自由も、そのとおり楽しむことはできないはずであります。今日は個人主義、自由主義というものが正しくは育つていない、大変ひん曲つてきているように思うのでございます。戦後は国家とか社会とかいう言葉はタブー視されてきた感じがするのであります。そのことがまたその国の社会体制を変えたいという考えの人達には全く当てはまるんですね。共産党の機関誌『赤旗』の一番上に「万国の労働者団結せよ」と書いてあるでしょう。あの方々は、この国家社会はブルジョアジーがプロレタリアを搾取する機関なんだ。だから資本家階級を倒して無産階級のプロレタリアートの社会を築くのでなければ、搾取と失業はなくなるんだと、こんな考え方を持っているんですね。前のロシアの社会を基本にして考え出されたものでしょう。「万国の労働者団結せよ」、こういう考えの人達には、日本国民はその次なんだと、日本国民より万国の労働者の方が大切なんだ、という考え方をしているのだと思います。だから国家社会を忘れさせる政策の方が、自分達の考え方を實現するのに適しているという考え方もあつたのだ

ろうと思います。だから、先生達の中には、親を愛する心は、親を大切にすることは、国を愛する心につながるのだ。国を愛する心は戦争につながるんだという。すぐそこへ行っちゃうんですね。だから俺は親を大切にしろとはいわないんだ。ほんとうにある話なんです。これは、昨年沖繩が日本に返ってきましたので、これを記念して沖繩で国民体育大会が行われた。私も開会式に挨拶をするために、沖繩に出かけました。競技はいろいろな種目にわたっているものから、多くの市町村に分かれて実施される。沖繩の教職員組合が、競技の行われる市町村に対して、競技の開始に当たって日の丸を掲揚し君が代を吹奏するようなことをされると、競技の運営には協力しませんよ、と申し入れをしたんです。国旗を掲揚する、国歌を吹奏する、そういうようなことをすると、沖繩の教職員組合の先生方は競技の運営には協力しませんよと、申し入れをしていました。その後、沖繩県議会の皆さんが各党派を網羅して東京の文部省の私を訪ねてくれました。そこで、県議会の皆さん方にはこう申したのです。国民体育大会のときに沖繩に伺った。そのときこんな話があった。こんな話を聞いたときに、沖繩の皆さんは日本人になるのがいやだといっておられるように私には聞きましたよ、と申しました。もしたら帰りがけに二、三の県議会議員の方々、

よくいつて下さいました、と感謝して帰られた方もあります。

国家とか社会とかいうと、すぐ戦争につながるんだ。こんな脅しをかけて国家とか社会を忘れさせようとする。こんなものの考えの人が多い。そういう人達に惑わされているのがいまの日本国民だと、私は思っているのです。なぜ国を愛し社会を愛することがいけないんでしょうか。それが戦争にすぐつながるんでしょうか。愛する心を持たないで、愛される国家社会は生まれてきません。愛する心なくしてどうして愛される国、愛される社会が生まれてくるんだろうか。国を愛し社会を愛する心なくして、どうしてうるおい豊かな社会ができるんだろうか、とこう申し上げたいんです。私は、日本が敗戦になった不遇のとき、占領軍はまた日本人が一致団結して他国にぶつかるといふようなことになつては大変だと、こう思ったと思います。だからバラバラ政策がとられたんだ。占領直後、修身の授業は禁止されました。歴史や地理の授業も廃止されました。教育勅語は国会で廃棄決議を強いられました。船舶をつくる場合でも、何ノット以上の速力はいけない、外国へどんどん行くような大きな船をつくってはいけない、何トン以下でなければならぬ。いろいろな制限を加えられたことは皆さん御承知だと思っております。けれど、国家社会を忘れさせる政策もと

られてきたと思うのでありまして、国家社会を忘れさせる政策は国家社会をぶっこわして「万国の労働者団結せよ」、階級が階級を支配しているんだという考え方を持っているものから、労働者独裁の社会をつくるのでなければ、搾取と失業はなくなるなんていうような考えの人達には、大変恰好の考えだったんだろうと思います。そういうものに今日でも煩わされるむきがあるなあ、と思うひとりでございます。マスコミの社会などは、右寄りの考え方は何でも反対し、左寄りの考えのことになると思いますが、でも大きく報道して行く。少し極端だなあと思っています。戦前戦中は左寄りの考え方は抹殺する。右寄りの考え方は大きく取りあげたものでございまして、全くあべこべになってしまいました。昨年の春の衆議院の予算委員会で、共産党の人から私はこんなことを質問を受けました。あなたは日本共産党は憲法を守らない政党だといっている。この新聞にあなたの話のついている。これは事実かと、こういう質問でございました。そこで私は答弁に立って、あなた達は憲法を護るような顔をしておられる。だから公の場所ではなるべくそんなことはいわないようにしているのだけれども、ほんとうにそう思っている。ほんとにそう思っているから、私はしょっちゅうそういう話をした。だから、あなたの示している新聞の記事は知らんけれども、

あるいは言ったかも知れませんが、こう答えたいです。文部大臣ともあろうものがけしからんじやないか、どうしてまた日本共産党が憲法を護らない政党だなんて考えているのか、とつめ寄ってきたのであります。そして議席におります年寄りの共産党議員が、野次を飛ばして、いまして、ここは公の場所ではないかというのです。そこでまた答弁に立ちまして、あそこで、ここは公の場所ではないかと野次を飛ばしておられるが、あなたが私に聞くから答えているんですよ。日本共産党は党の綱領解釈をいろいろ変えておられるようだ、プロレタリアートの独裁という言葉も何か解釈を変えたりしておられますね。あんた達の綱領、いろいろに解釈を変えておられるようだけれど、その綱領と日本の憲法と適合しない面が沢山あるんじゃないやありませんか、と私は答えたんです。そしてまた次の質問にいろいろ具体的に話し合おうと思っていたのです。そして質問者は、その次にはもうこのことには触れませんが、全く別のことに移ってしまいました。翌日の新聞を広げましたら、この質疑の内容は何も書いておりません。ただ奥野文相「タカ派」とだけ出ておりました。ひどいなあ、と思いました。日本共産党は憲法を護らない政党であるということを、衆議院の予算委員会の席上で認めただんではないかと、私は思うんです。折角認めたことには一

切触れないで、ただ私をタカ派とだけきめつけてしまつて、ひどい扱いだなあという感じを、私は持ったんです。やつぱりマスコミは物事を正しく伝えなければいけない、あまりにも偏向しすぎているなあという考え方を常日頃しているものですから、チョツピリこのことをつけ加えさせて頂いたわけでございます。

第三に、学校教育の問題に移つて行きたいと存じます。今日では、進学率が非常に上昇している。戦前は小学校六年を終わりますと、中等学校、いまと違つて五年制ですね。同一年齢層の二十五%が中等学校へ進んだものであります。さらにそのうえ高等学校、専門学校の三年制へ同一年齢層の五%が進んだのであります。さらにそのうえが大学三年制でありました。同一年齢層の1%のものが大学に進んだんです。現在では、小学校六年を終わりますと、義務制で全部三年制の中学校へ進みますね。さらに中学校を終えると同一年齢層の九十%が高等学校に進んでいるんです。高等学校を卒業しますと、同一年齢層の三十三%が大学へ進んでいるんですよ。戦前の大学令には、大学は国家有用の人材を育てるんだと、こう書いてありました。いわゆるエリート教育です。今日の大学は大衆化されている。国家の中堅を教育して行く、国民の資質の向上、そういう役割を大学は担っている。大学を出たからといって、特別の教育を

受けているわけではありませんね。当たり前のことだと。さらに勉強したければ、大学院でも進んで勉強することになるだろうと思ひます。しかし、こんなに早く日本の進学率が上がった。義務教育六年制から義務教育九年制になったのは、昭和二十二年であります。二十年に戦争に負けた。日本中が焼野原になったんです。学校の教育などよりも戦争に勝つことだと、女生徒まで工場に狩り出されて軍事生産などに当たつたものであります。男はみんな戦争に行つてゐる。女もいまいったとおり戦争に協力し、教育など行われておりません。それが二十二年に突如として全部中学校に進むことになり津々浦々に中学校を建てなければならぬ。その中学校には必要な中学校の教師を全部配置しなければならぬ。手当たり次第に町の人をひっぱつてきて学校に入れて、教師というレッテルをはつたのがその当時のことであります。私はそういうちよつと極端な譬喻を用いるんですけれども、先生たるに値する人を学校に迎え入れて先生の役割をしてもらつたのではない。先生なんていなかったんだ。人をひっぱつてきて、先生というレッテルをはつたんだと、こういつているのであります。1%のものが大学に進んだんだ。いま三十%のものが大学に進んでいる。そんなに沢山の先生の先生を一挙に育て上げることができらるだろうか。極端な質



の低下をきたしているんですよ。だから私は日本の教育は量的には非常に拡大をしたんだけど、質的には非常に問題点をかかえているんだというのです。ここだから率直にこんなことも申し上げるんですが、先生を前にしてこんなことをいいたら袋たたきにあいますね。やっぱり教育の基本というものは、教育の担い手である教師にあると思います。どんな立派な自動車をつくりましても、その自動車を動かす人がそれなりの心得を持っていませんと、車を傷つけてしまう。中に乗っている人達が怪我してしまいます。どんなに立派な学校をつくり教材を整えても、先生方がそれに値する人ではありませんと、まともな人間が生まれてきませんね。私は教育の基本は教育の担い手である教師にあるんだ、とこういっています。文部省や地方教育委員会は、教育の諸条件を整備して行くんだ。立派な先生方が教育界に入ってくださるようにしなければならぬ。校舎や設備の完備もしなければならぬ。教材を整えなければならぬ。だから先生なり、先生なりの集団と文部省なり、教育委員会なりとは力を合わせて進むのでなければ、日本の教育の振興は期せられないものではない。こういっているんです。そして先ず立派な方々を教育界に導き入れることだ。

さきごろ人材を教育界に導き入れるための

法律をつくりました。そして先生方の給与は一般公務員に比べて優遇されなければならないと書きました。一般の公務員なみにあげて行くほかに、四八年度の予算で十%嵩あげする予算を組みました。四九年度にもまたもう十%嵩あげすることにしました。もう十%嵩あげする予算はもうできあがっているのであります。教育界というところは、将来日本の国家社会を担って立つ青少年を育てて行くところですから、日本の国家社会の命運を託されているところだと、こう私はいつているんです。日本の国家社会の命運の託されているところが教育界なんだから、働いてくださる方々の責任は非常に重いな。責任は非常に重いなだから、働く人々の給与は一般の公務員に比べ優遇されなければならない。そう申し上げ、そのような施策を進めているところでございます。給与をあげただけで、立派な先生方がきてくれるわけでもない。社会全体が、先生を尊敬するようになって行かなければならぬ。それには先ず先生の資質も向上して行かなければならぬ。こう思っているわけでありませぬ。そして先生を尊敬する社会、社会から尊敬される先生、それをつくり上げるのが私の責任だと思っております。だからまた先生方は、ひとまずは世界を見てもらう。こういうことで、五〇〇〇人の先生方に海外へ出て行ってもらったのであります。世界を見た

目で日本の教育に当たってもらおう。やっぱり世界を見ると、ふりかえって見て日本はいいなあと、あるいは日本でこんなところに力を入れなければならないと、いろいろ考えて下さるようであります。数年前にチェコスロバキアでドブチェク氏が共産党第一書記になってから、自由化路線を歩み出した。しかし、やがてソビエト・ロシアの大弾圧をくらって、もとの木阿弥になったということがありますね。チェコスロバキアへ行って、いろいろなことを聞いてこられる。プラハの大学で学んでいる学生が、この国ではソビエト・ロシアの批判ができない。フルシチョフの批判めいたことをちよつと書いたら翌日は鉱山労働者に配置換えになってしまった。もう簡単にできるんですね。またチェコスロバキアに留学していられた方が帰ってこられまして、昨日まで教壇に立つておられた方が、今日は道路工夫として道路の掃除に当たっておられる。肅清を受けたんでしょう。自由主義的な考え方が強いと見られたということかも知れません。日本に帰るときに三十通ばかりの手紙を渡された。みたら、自分が日本に出した手紙もあつたし、日本から自分に届けられた手紙もあつた。信書の秘密がそんなに簡単に破られているとは思っても見なかった、なんていたりしているようでございます。またあるいは教室にその国の国旗が掲げられている。あ

るいは大統領の写真を掲げていて、いずれそれなりに国家意識を養う、国民意識を持たせようと努力をしている。日本では日の丸を掲げるだけで笑われてしまうような風潮がある。反体制さえしていれば恰好がよい、という流された風潮は、これは考え直さねばいけないという先生もあるようです。改善しましても、勉強というものは学校に長くいるから立派な人間になって行くわけじゃない。学校に行っても、自ら学びとる意欲を持たない限り、無益なものだろうと私は考えます。だから勉強するということは、先生が教授するというのではないんだ。よく学び、よく遊ぶことを助ける、それが先生の役割だと、学びとろうとする意欲を起こさせる、それを助けていく、それが先生の役目じゃないかなあ、と想ったりしているわけでございます。

私は運動部の生活をしてきた人間です。小学校三年のときからラケットを握ってきた。中学校二年のときにテニスの県下の大会があつた。私を補欠として勝手に名前を使った。私は中学時代大いに勉強したいという気持を持っていたから、運動部の選手になる意志はなかつた。ところが試合に負けてしまったんです。途端に来年は勝たなければならぬ。これが動機で選手生活に足をふみこんでしまいました。したがって高等学校も選手生活を送ってまいりまし

た。高等学校の二年の六月には早稲田高等学院と試合をして、シングルで非常に長時間にわたる熱戦をやった。まあようやく私が勝ったんですが、翌日目をさまして見たら、呼吸するたびに胸がキツキツと痛む。医者がきて診てくれると、急性肋膜炎。やがて試験が始まる。さつとその晩に私は復合車に乗って郷里に帰りました。東京駅頭に送ってくれた友達たちは、後日これが最後の別れだと思っておったというようなことをいっておりますけれど、その後三か月間寝たきり、タオル一つ自分でしぼれなかつた。それが回復したんです。そしたら今度は先輩が田舎の家にやってみりまして、キャプテンになれという。私はもうそれを機会にテニス選手生活をやめようと思っていた。やめさしてくれない。それならマネージャーをやるといったんです。けれどどうしてもきかない。君がキャプテンを引きうけるまでは、お前の家を去らないよ、とこう頑張られた。そういうことでラケットを握っちゃいけないよ。しかしキャプテンをやってくれというようなことで適宜誘われました。しかしキャプテンになると責任がありますので、やっぱりぼつぼつラケットを握り出して、三年のときにはダブルスだけ試合に出ました。しかしやっぱりこれが災いをいたしました。秋には肋骨カリエスになりました。大学病院に行つて見てもらいますと、けずった方が

いいでしょうとおっしゃる。それならけずつて下さいといった。待つていたけれども、なかなか呼んでくれない。どうしたんですと看護婦さんにきいたら、手術には手間がかかるんですから、準備に手間どつてるときいてびっくりしました。そして手術台のつてこのくらいほど肋骨一本とつてくれた。とつてくれて、その足で電車にぶらさがつて渋谷から東横線に乗つて、兄の家に私は行きました。このごろの人にその話をすると、びっくりされるようでありません。私の学びました高等学校は全寮制、テニスの選手生活でありますから、暗くなりまして、ボールを高くあげてスマッシュングを打ちこむ。この練習をするわけでありませう。もうボールが見えなくなつてから、練習をやめるわけでありませう。食堂は終わつちまつていますから、事前に「止め食」をしておく。蝋燭を持って食堂へ行くんです。そして残されているご飯にありついで、それから外の銭湯に行く。銭湯に行つて、帰りがけにコーヒーをのんでくる。いろんな議論を先輩や同僚としている間に乾く。帰つてから机の上に腰掛けて、濡れ手拭いを肩にしてよくトランプをやる。十二時になりますとあかりが消えてしまいます。二階は寝室、それから二階にあがつて蝋燭を枕許に立てて——私はその運動部の選手生活に「ノー文句」で（ノーモックという相言葉もございました。）練習に打



ちこみながらも、これでいいだろうかとという悩みを持ちつづけておったものでございます——そんなことで蠟燭を立てながら、カントだ、ヘーゲルだなんてものを読んでいた。疲れ切った頭で、なかなか読めないものであります。とにかくそんな生活をしておって、三時だ四時だになって腹が減ってくる。門を乗り越えて町へ行って、屋台にも随分まいりました。私の高等学校は正門主義といっておりますね。正門以外は通用しちやいけないんです。正門はしまつていきますから、その正門の上を乗り越えるんです。他は使わないんです。まあ、そういうことでやっていたわけですが、従つてまた昼前にならないと眼がさめない。そうすると、大学生が遊びにきている。あれやこれや議論する。そのうちに練習の開始になる。まあ、そんな無理をしてきたから、だから病気をしたんだと思ひます。やっぱり生身の体だから、無理はしてはいけない。無理をしたときは、休養しなければならぬ。まあ、そういうことを体験で覚えたもんですから、私はしごく健康でございます。ちよつとやそつとでは死なないので、申し訳ないかも知れませんが、大変よい自覚を得たと思つているわけでございます。

だから、いろいろな失敗もしているわけでございます。夜中に頭が熱い。びっくりして目がさめましたら、蠟燭を抱いて本を読んでいる

うちに寝てしまった。燃えているんです。枕が燃えちやつて、頭に火がついてはじめて気がついた。もう部屋のなかは全部黒煙濛々、皆すやすや眠っているんです。急いで窓をあけて煙を出して、夜が明けるか否や外へ出ちまいました。そして床屋さんで頭をかつてもらつた。ところが友達は何も知らない。まあほんとに疲れきつていたものと思ひますね。まあ、そんな生活です。それから、私は授業には出ませんでした。大体代返をしてもらいます。試験のときには先輩のノートを読みました。大学のときにはプリントを売つておりましたからね。これは店屋さんからプリントを買つてまいりました。私は、よくノートをとらせるとは、無駄なことをする先生だなあという感じを持つておつたんです。自分でノートをとらなくてもあとでプリントを買えば簡単に読んではまえるのですから。無駄な時間とはならないで、もつと有効に時間は使つた方がよいと私なりの考えを持つておつたわけでございます。戦後アメリカからきた人が、日本の大学の文科系の講義は連続講演会みたいなものではないか、あれじゃ学生が可愛そうだな。先生はもう少し学生の面倒を見るべきだ、なんて批判もしております。日本の教育のあり方についていろいろ考えるところがあるような気がいたします。そうやって代返ごに過すんですけれども、先生によりますと、出欠をとつ

て空いている席がいくつあるかと勘定するんです。出欠をとつた欠席者の数より空いている席の数が多いと、もう一ぺん調べなおすんですね。これにはさすが私も、欠席が見つかつちまうんです。学期の始めには、各学課について六〇点に達しないと注意をされるが、私は学課の注意点はもらわなかつたのですが、奥野君は教務から出没常ならずと書いた御注意をうけたわけでございます。まあ私のような生活がいという意味で申し上げているわけではありませぬ。

やっぱり人生は大いに悩んでしかるべきだと思ふんです。私達のころは、人生観だ、世界観だということがよく議論をされた。人生いかにあるべきか、なんてよく議論したものであります。いまそういう場合の初歩的な読書といましようか、そういうようなものでは私達のころには阿部次郎の『三太郎の日記』でありますとか、西田幾多郎の『善の研究』でありますとか、倉田百三の『愛と認識との出発』や『出家とその弟子』とかという本を先ず読んだ。それからだんだんカントとかヘーゲルだとか、蠟燭を立てながら読んでおつて、学校の方は勉強はなにもしなかつた。人一倍本を読んだと思ひます。学校の授業には出ませんで、試験だけはちゃんと受けてまいりました。まあ、そういう行き方も一つだろうと思ひます。教育というも

のは自ら学びとる意欲を持って努力するの  
なければ、実を結ばないものだ、こう思っ  
ております。そこへ前川塾長さんの一番嫌いな  
麻雀など、大学時代はこれで時間をつぶした  
方が多かったですと考えます。麻雀もやりま  
すし、碁もやりますし、花札もやりま  
す。随分室内遊戯はたいがい知っている  
つもりです。だから人づき合いはきわめ  
ていい方だと思います。まあ、やっぱり  
人間関係をよくすることは若い時代に  
心得るべき大切なことではないだろうかと  
思っています。すぐ役に立つ勉強など  
あまり心掛けないで、将来の人間の基礎  
になる勉強を大いにやっておきたいよ。  
そしてよき友達をつくる、人間関係を大切  
にする、そういうことが重要なことだ  
と思っております。大学の自治のことなど  
いろいろ申し上げたいと思っ  
ていたのですが、もう十一時になっ  
てしまいました。

そこで結論的に、私はいまの日本、外国から  
きた人達によくこういいます。日本の姿を見て  
いると、「声あるところに心なく、声なきとこ  
ろに心あり」、これが日本の今の姿だとい  
うんです。「声あるところに心なく、声なき  
ところに心あり」。ストライキだ、デモだ  
というようなことで大いに町をねり歩いて、  
怒声罵声を浴びせかけて行く大勢の人達も  
沢山います。騒いでいられる人達の心の中  
に、ほんとうに日本の

国家社会の将来を憂える心があるん  
だろうか。それより黙っておられる  
人がほんとうに日本の将来を心配  
しておられるのじゃないか。声ある  
ところに心なく、声なきところに心  
あり」。私もだんだんそんな気が  
するんです。左翼の人達は、すぐ  
赤旗を掲げて腕章をつけて、ゼッ  
ケンをつけてワーワーわめき出  
す。共産革命であみ出された戦術  
を丸覚えにして、その通りやっ  
ている。教条的だなあ、もう少し  
日本の表現のあり方を工夫してし  
かるべきじゃないかと、思っ  
ています。全く付和雷同だなあ、  
「和而不流、和而不同」。こんな  
主体性のない国民に、日本人は皆  
なっている。ほんとうに皆さん、  
主体性のある人間になって下  
さいよ。そして国家社会におい  
て何らかの役割を演ずる気概  
を持って下さいよ。そして時間  
は有効に利用する。長い時間  
にすわっているだけが勉強じゃ  
ありません。私は、その深さが  
問題だと、深さと長さの積が効果  
になってくるんだと、こう思っ  
ているものでございまして、皆  
さん達のこの学生時代は、もう  
二度とはこないわけですから、  
悔いのない学生時代を過ぎて頂  
きたい。悔いのない学生時代、  
いかにあるべきかということ  
を大いに悩んで下さい。苦し  
んで下さい。その中から皆  
さん達の人生が開けてくるん  
です。考えない人間になっ  
ては駄目です。悩まない人間  
じゃ駄目だ、とこう思っ  
ています。私は

自分をふり返って見て、やっぱり大いに人生  
とは何ぞや、世界とは何ぞやを、ようお考  
えなさい。そしてよき友達をもつ和敬塾とい  
う恵まれた環境の中で皆さん達は勉強して  
いるんですから、お互い肝胆相照らす仲  
になって頂くように心から期待いたしま  
して、私のお話を終わります。どうも御  
清聴頂きまして有難うござい  
ました。(拍手)

(文責在記者)

※DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が  
用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、  
当時のままといたしました。